灼かれた影

一

「つま子、愛してる！」

沙織莉が抱きついてくる。私はこういう時、どういう顔をしていいのかが分らない。だから抱きつかれた儘呆けた顔をする。

「つま子のその顔」

藍が私の表情を見て笑う。沙織莉は

「つま子はシャイだから赧れてるんだよねー。ねー」

と私を抱き締め左右に振る。背の低い私は思うが儘揺ぶられる。

「私は果汁百パーセントのジュースか」

私がいうと沙織莉がぴたりと止る。沙織莉は藍を見る。

「よく振って下さいってことね」

藍が注釈を加える。

「アッハハハハハ左右いうことかアハハハハハハハハ」

沙織莉がお腹を抱えて笑い転げる。私はすべった恥しさで夕焼けを見た。

蝉が相変らず皐蠅い。外で話しているだけで、汗が頸筋を伝う。公園のベンチは日中に灼かれた熱をまだ秘める。制服のスカートが燃え尽きないかと心配する。

三人で暫らく話して帰った。「つま子また明日」笑う沙織莉と藍に私は控えめに手を振った。

新井津甘という名前が嫌いだった。「つま」という音の所為で「ワイフ」「未亡人」「爪楊枝」「アライグマ」、漢字の所為で「甘酒」「甘味料」「スイーツ」「天津甘栗」などと小学生の頃から散々からかわれた。小学生の時好きだった隆君から「つま」と呼び捨てにされた時は胸がときめいたが、私は可愛

くない、いわゆる不好だったから、そのときめきは其儘胸の中に隠しておいた。

隠しておいたら、腐るのか、夫とも、熟成して益濃く豊かになるのかと思っていたら、いつか消えていた。隆君とは中学校が別だったし、夫に、彼は人気者だったから、小学五年生の時にはもう彼女がいた。彼女は何回も変った。皆な可愛い子だった。何人変っても、私の番が来ることはないんだろうと、思った。

中学生の時は正太郎君のことが好きになった。私の身長は大して伸びずに止り、胸も小さい儘で、責めて、同じクラスの歩美ちゃんみたいにスタイルがよければ、私のよくない顔を補えるのにと思った。鏡を見るのが嫌いだった。買い物に行って、エスカレーターの脇に鏡があると、目を逸して見ないようにした。

正太郎君は到底も爽やかで優しい男の子だった。誰にでも親切で、分け隔てなくその笑

顔と優しさを振り撒いた。同じクラスの嫌な奴、大内が、私と同じ委員会に入っている男子がいて、そいつがある日私に言った。

「アライグマー」

「その呼び方やめてよ。何」

「今日の委員会お前一人でよろしく」

「ちょ、ちょっと待ってよ。なんでよ」

「なんでも何も、面倒いから」

「いや、私だって、面倒くさいし。勝手すぎでしょ」

「うるせえなーブスは黙って行きゃいいんだよ」

言われた瞬間衝撃で喋舌れなくなった。自分でも、不好だって、分っていた積りだったけど、他から言われると夫が覆りようのない事実に変って仕舞った気がして、私の頭と胸が強く締め付けられた。

「は、はー？　私、ブスじゃ、ないし……」

強気に返そうとしたが駄目だった。ボロボロと涙が零れた。胸が何度も迫り上ってきて、

喋舌(しゃべ)れない。近くで聞いていたのか、正太郎君が前に出て言ってくれた。

「お前女の子に言っていいことと悪いこと考えろよ」

それを切懸(きっかけ)に周囲の女子も加勢してくれた。

「そうよ大内。女子に何言ってんの」

「最っ低」

「自分だって不細工のくせに」

大内は四囲(まわり)から厳しく非難されて逃げ出した。誰かが背中を擦(さ)すってくれ、誰かがハンカチを貸してくれたが、涙を止めることが出来なかった。私は正太郎君のことを益々(ますます)好きになったが、此(こ)んな不好(ぶす)に好かれても嬉しくないんだろうなと、いつもより明然(はっきり)考えた。

二

「つま子、直(そろそ)ろ行こうよ」

休み時間、無心でペン回しをしていたら

沙織莉に呼ばれハッとする。ペン回しは私の唯一の特技だ。ペン回し職人という仕事があれば弟子入りしたく思う。

「えっ次って何だったっけ」

「化学だよ。実験室」

慌てて机の中に雑多に放り込まれた教科書類を雅繰る。

「早くー早くー休み時間が終るよー」

沙織莉が私を急かす。私は必要最小限の動きで適確に必要なものを選び抜いてゆく。

「よしっ行こう！」

高らかな宣言と倶に荷物を引きずり出したら、其反動で机が豪快に倒れた。藍が噴き出し沙織莉が声を挙げて笑う。

「今の、今のつま子の自信満々の顔」

沙織莉はお腹を押えて膝を打った。ヒイッヒイッと変な笑い声を漏らす。私は悪目立ちした恥しさで耳まで真っ赤になった。

「何してんの、はい」

声と音がしたので振り向くと、陽樹君が片

手で軽々と机を起してくれた。胸が強く脈打つと同時に見られた恥しさで「ヘアッ」と奇声を発する。

「もう、もうダメ」

沙織莉がうずくまってヒイッヒイッと笑い続ける。陽樹君も噴き出し顔を背けて肩を震わせる。藍が「あんたはウルトラマンか」と笑った。

「違うの、違うの、ありがとう新澤君」

失点を打ち消そうと急いでお礼を告げる。陽樹君は肩を震わせた儘「いい、いいんだ」と答えた。

実験室には四人で並んで向った。沙織莉は笑い上戸なので、私は失敗をするとすぐ笑って仲々収まらない。「ヘアッ」「ヘアッ」と腹を震わせつつ呻く。

「沙織莉笑い過ぎだよ。もういいだろ」

「だって、だってつま子が。あんな声出すから」

沙織莉と陽樹君は幼馴染なので、仲が好い。

弾けるような笑顔と弾んだ声で話を交す。其遠慮の入れない距離を羨やましく思う。

「つま子」

藍がそっと囁いて私の肩を手で払う。何かと思って藍の顔を見上げると、「ごめんね、髪の毛ついてたから」と優しく笑う。

「あ、有難う」

背が高く綺麗な顔をした藍に憧がれる。廊下に夏の強い日が差して、みんなの横顔を照らし、私の黒い髪を灼く。

公園のベンチに座ると、町が見渡せた。坂許りのこの町の中でも高台にあるこの公園は、夜になると広がる家々の灯りで景色が輝やくので、どこから湧くのかカップルどもがやってきて観光していく。だから夜になるまでが私の憩いの場となる。たまに夕方に来たカップルが「きれいだね」と言っていると「皐蠅え早く別れろ」と思う。私に恋人がいたことはない。

中学生の頃から能くここへ来ていた。いいことがあった時も、嫌なことがあった時も、ここのベンチに座った。ベンチのそばには大きな木が植えてあって、葉蔭で夏も直射日光は中らない。風もあるので涼しい。が気温そのものは如何ともし難くハンカチでおでこと頸筋の汗を拭く。

私は、虐められたことはなかったけど、能く揶揄かわれたり馬鹿にされたりした。勉強も然程出来ないし、運動音痴、歌や絵などの芸術にも長けておらず、何より性格が陰気だったので、仕方ないかと思う。誉められたり好かれたりする人間は必らず何かを持っている。私とは人間の種類が、生れた時から手にしているものが違う。

「つま子ちゃん」

呼ばれて素速く振向くと、陽樹君がいた。

「は」咄嗟には声が出ない。「新澤君」體温が急激に上る。

「いやー今日も暑いね。帰る丈で汗だくだ

く」

陽樹君がワイシャツの胸元を押し引きして空気を入れながら私の隣りに腰を卸す。私は見え隠れする鎖骨と、細くて長い五本の指を盗み見る。

「ね、暑いね」

気の利いた応答が出来ず、彼の言葉をくり返した。

「今日はごめんね。沙織莉がいつまでも笑ってて」

言われて何の事かと思う。言葉が出ずに考えていると「あの、実験室に行く時さ」陽樹君が助け舟を出してくれる。

「あ、ああ、ああ、いいの、大丈夫。全然、そんなこと」

「本当に？　あいつ、一度ツボに嵌るとひどいからさ、もし嫌な思いさせてたら悪いなと思って」

「ううん、ううん、沙織莉ちゃん、馬鹿にして笑ってる訳じゃないの分ってるし、夫に、

思い切り笑ってくれた方が気もち的にも助かるし」

「まあ、確かに、笑ってくれる人いなくて悲惨な空気になることあるよね。フォローしてくれてありがとうね」

陽樹君が私を見て笑う。私は何て気遣いのできる人なんだろうと感激して胸がきゅっと締る。私は優しくされるのに弱い。思わず陽樹君から目を逸す。

陽樹君はしているアルバイトの話をしてくれたり、私の好きなテレビ番組の話を聞いてくれたりした。私は帰宅部でこれという趣味もないので、家にいるときは宿題をやるか漫画を読むかだらだらとインターネットをやるか位のものだが、お笑いの番組が好きなので色々とチェックをして見ている。お笑いは陽樹君も好きらしく私は共通の話題があることに喜こぶ。

陽樹君のアルバイトの時間が近いたので途中まで並んで帰った。陽樹君に手を振って

別れ、少し歩いて振り返り、陽樹君の背中が見えなくなるまで目で追った。

三

教室で一人ペン回しをしながら幸福感に浸っていた。最近、陽樹君が公園に来てくれるペースが分って来た。アルバイトのシフト（私はシフトというものが何なのか今一分っていないが）の都合で水曜日に働らくことが多いらしく、その出勤時間までの間が暇なのだそうだ。

「あ、暇って言ったら感じ悪いね。ちょうどね、つま子ちゃんと話してると癒されて落着いた気もちでバイト行けるから、ちょっと寄らせてもらってます。でも、もし邪魔だったら控えるから言ってね」

「邪魔だなんて、そんな、全然」

一週間前に言われた「癒される」という言葉を思い出しニヤニヤする。ニヤニヤを隠す

ために口元を右手で隠す。左手のペンが非常な速度で回転する。

「なんかね、ダメだよね」

声が聞(きこ)えて我に返ると教室には人がいなくなっていた。私だけが席に座っていて、クラスメイトの女子二人が入口の近くで向き合って話している。

「調子にのってるの、分(わか)るよね」

「そうそう。お情けで同じグループに入れてもらってるのに、夫(それ)が分(わか)ってないっていうかね」

「外から見て明らかに浮いてるのが分(わか)らないもんかね」

「自分が特別だと思ってるんじゃない？むしろ、自分が中心だと思ってたりして」

「あり得るかもしれない所が怖いわ。鏡見てみろって」

「叫んできなよ。鏡持って『これ見てくださーい』って」

「ダッシュで」

二人は惴栗とするような大声で笑った。私は、何故だか、私のことだと、思った。自分が馬鹿にされているんだと。悪意が脳や耳や胸に刺さる気がした。調子にのっている訳じゃない。私だって、自分が不好だって、沙織莉や藍や陽樹君が優しいから仲好くしてくれていることだって、分ってる。鏡だって毎日見ている。毎日暗い気もちになっている。もし自分が可愛ければ。恵まれた容姿に生れていればと毎日思っている。調子にのっている訳じゃない。分っている。

言葉は頭や胸に次々湧いていたが、怖くて顔を上げられなかった。もし上げれば、嘲笑が其所に待っている気がして、臆病な私は立ち向かえなかった。或は私のことではないかもしれなかった。単なる被害妄想かもしれなかった。私は怒りよりも汚名を濯ぐことよりも只怖かった。私は顔を上げられずにいた。

廊下から、扉越しに話し声が聞えて、沙織莉と藍が教室に入って来た。女子二人は既にい

なくなっていた。沙織莉が不思議そうな顔をする。

「つま子、どうしたの？　帰ろ」

「あ、ごめん、今日用事思い出したんだ。先に帰ってて」

蝉の声が響いて教室は暑かった。私は熱気から逃げるように鞄を手に取り、馳け出した。

公園のベンチにお尻を抛げ出すと汗が噴き出した。走ったことにより蓄わえられた熱を汗と息とで追い出そうとする。胸が苦しい。頭が疼痛々々する。

ハンカチで顔を覆い、おでこを膝に当てた。やはり蝉が皐蠅い。汗はあっという間にハンカチを濡らす。長い時間を掛けて、荒れた息を鎮めた。長い時間をかけて、よりそぼ濡れたハンカチは、私の指先をふやかした。

私は悪くない。私は分っている。口の中でくり返した。私みたいな不好が、沙織莉と藍

みたいな明るくて、みんなと仲の好い、可愛い、綺麗な子達と対等に付き合える訳ないこと位分っている。調子になんかのっていない。調子にのったことなんか一度もない。沙織莉が、あの時、修学旅行の班を決めるとき、いつものように一人排出れて先生からのお情けの声を待ち侘びていた私の、腕をとって自分の班に引き入れてくれた時から、笑って「あなた、私の班に、入る。私達、ハッピー。あなたもハッピー。私はハッピー大使！」と言ってくれた時から、私の人生に華やかさや楽しみがほんの少し加わり始めたあの時から、沙織莉への感謝の気もちを忘れたことはない。「勝手に大使を名乗るな」と笑って沙織莉を諫めながら、「ごめんねこの子強引で。新井さん、嫌じゃなければ私達と一緒の班になってくれない？」と微笑みかけてくれた藍への敬愛の気もちを忘れたことはない。二人と、対等だなんて、一度も思ったことはない。私が認めない。だから、そんな、的外

れな嘲笑をするな。

虐められている訳じゃない。私よりずっと非どい目に遭っている人は世界中どこにでもいる。夫は分っている。分っているけど、私は、時々つらくて泣く。

蝉とともに十分ほど泣いたら気もちが収まってきた。一々大袈裟なんだよ。ハンカチで目元を拭いながら思う。他人から、自分の見た目の好くなさを指摘されると、いつも気もちが沈む。「可愛い」というのは、自分以外の人間専用の評価なのだと、切に思い知る。自分の自分に対する評価はそこに影響しない。

だからと言って、本当に自分に向けられたものか分らない言葉にまで傷つけられるのは馬鹿げている。しっかりしろ、と顔を上げた瞬間声をかけられて心臓が跳び跳ねた。

「つま子ちゃん」

振り返ると自転車を引いた陽樹君が心配そ

うな顔でこちらを見ていた。私は恥しくて目を伏せ濡れたハンカチを掌らに隠そうとする。が私の小さな手には収まり切らずハンカチは糸かに顔を出した。

「ごめんねーいま大丈夫？」

いつもの穏やかな話し方で問われ、嫌とは言えなかった。只泣いてしまった後の崩れた顔を見られたくなかった。私は化粧もしていないし崩れる程の素地があるのかと言われれば夫は慥かにないのだけど、夫でも崩れた顔が崩れたら益悲酸だろうという論理で以て羞恥心が膨れ上った。左んな私に頓着なく陽樹君は自転車をとめ、私の隣りに腰を卸した。

「つま子ちゃん、聞いてよ、今日体育の授業で失敗しちゃったんだ。サッカーやってたんだけど、同点の儘試合が終りそうな直前でね、相手ゴール前で僕にボールが回ってきたんだ。僕は是はもうチャンスと思って渾身の力で右足を振り抜いた。でも力を入れすぎた

のかボールはゴールを外れてバーに当っちゃったんだ。夫所かバーに当った後凄い勢いで僕に返ってくるもんだから思いっ切りおでこに当って吹き飛んじゃったよ。ゴールは外すわみんなに笑われるわでもう恥しかったよ」

ニコニコしながら自分の失敗談を話す陽樹君を見て凄いなあと思う。私なんて失敗するのが当り前だから最早笑ってももらえないし本気で怒られることもある。陽樹君が運動できることを私は知っているしみんなも知っているから同じ失敗でも温かく受け容れてもらえるんだろうと思った。

「私、私なんて運動音痴だからほんと非どくてね、小学校低学年の時だけど鉄棒やってたの。逆上がりの授業だけど私本当に何度やっても何歳になっても出来なくてみんな呆れた空気になってた。そこで偶ま校長先生が通り掛って『私が押して上げるからもう一度やってみなさい』って言ってくれたの。手伝っ

てもらった状態だったら出来たんだけど、折角押してくれるって言うからお言葉に甘えてお願いしたのね。ただそしたら校長先生が物凄い勢いで押すの。私ビューンって回って必死に鉄棒にしがみついて何とか逆上がりできた。でも爪先に何かよく分らない黒い物体が載っかってたのね。それ校長先生のカツラだった。私、先きなんて比較にならない程空気が凍りつくの感じて逆上がりさえ一人でできていればって子供ながらに強く思ったよ」

私が話すと陽樹君がお腹を抱えて大声で笑った。

「それ、それ、その後どうしたの。体育の先生とかも見てたんでしょ」

「校長先生は光の速さで私の爪先からカツラを奪って校長室に戻っていったよ。誰かが『あれが校長先生の真の姿か』って言ってみんなが笑いそうになったけど、その瞬間体育の先生が鬼のような形相で怒鳴って誰も笑えなかった。今思うと私達が気付いてなかっ

た丈で先生方は知ってたのかもね。勿論張本人の私は後でひたすら怒られて非どかったんだから」

「いやーさすがつま子ちゃんだね」

陽樹君が目元を拭って笑ってくれる。私も釣られて笑って、強張ってた胸の息が静かに出ていくのを感じる。やっぱり、陽樹君は凄いなあと思う。

「でも、大丈夫そうで安心したよ。なんか沙織莉が突然来て『ちょっと行ってこい』って言うから何事かと思った。大丈夫？　何かあった？」

陽樹君の言葉に胸が詰る。沙織莉に対して感謝するとともに、恥部を見られたような恥しさを感じる。私は又少し目を伏せて、湿ったハンカチをぎゅっと握った。

「ううん、そんな、大げさな事じゃないの。ごめんね迷惑かけて。沙織莉ちゃんと、藍ちゃんにも、嫌な思いさせちゃったね」

「迷惑じゃないよ！　友達だったら、友達

に何かあったら、心配するでしょう。話したくないことを無理に話すことはないけど、でも、人に話して楽になることもあるからね。あの二人だって、嫌な思いなんてしてないよ。大丈夫」

「迷惑じゃない」という言葉と「友達」という言葉に、胸がきゅっと締(しま)る。私は掌(てのひ)らのハンカチを弄(もてあそ)ぶ。

「ありがとう。ごめんね。うん、……ごめんね」

私が言うと陽樹(はるき)君は少し困った顔をした。その後、切替(きりか)えてベンチから見える景色に目を移して言う。

「まあ、役割みたいなものもあるしね。愚痴とか、弱音でも、親だったり、兄弟だったり、友達だったり、好きな人だったり、この人に言いたいって思うことも、この人にはちょっと、って思うこともあるよね。僕は割(わり)とお喋舌(しゃべ)りな方だからつい喋舌(しゃべ)っちゃうけど」

陽樹(はるき)君が笑いかけてくれるのを見て

「好きな人」

思わず口に出す。

「新澤君も好きな人いるの」

陽樹君は一度止って、更に困ったように笑った。

「つま子ちゃんは？」

訊き返されて戸惑った。同時に何を訊いてるんだと遅れて顔が上気し出す。

「い、いるような、いないような」

「どんな状況？　どんな人？」

「や、優しい人です。凄く。状況？　状況……」

「どうしたいとかあるの？」

「いや、私なんて、恐れ多いというか、譬えば付き合いたいとか、左んな望みを持ってはいけないというか……今の、話したり、遠くから見たり、できるだけで、幸せです。その人と私じゃ釣り合わないのは分り切ってるんで、そんな」

「本当にいいの？」

「……」

「もっと仲好くなりたいとか、一緒に過したいとか、思わない？」

「それは……」

「もし其人が例えば結婚してるとか、まんがの中の人とか、左右いうことなら別だけどね、基本的には同じ人間だもん、釣り合うも、釣り合わないも、ないよ。其人が自分のことを認めてくれるかどうか、好きになってくれるかどうかだけだよ。自分にどんなに自信がなくても、自分のことがどんなに嫌いでも、其人は、夫でも君のことを好きになってくれるかもしれない。其答えを持っているのはつま子ちゃんじゃない、相手の人だよ。だから、どんなに卑屈な思いを抱えていても、其相手に対してだけは、其儘の自分でぶつかっていかなきゃ其答えを得られないよ。

「人に気もちを伝えられるっていうのは、素晴しい、素敵なことだよ。傷くことも、失なうこともあるけど、夫でも自分の気もちを

伝えなくちゃ、其人には一生君の気もちは届かないよ。君の気もちは、君の体を通さないと、どこにも行けないんだから。自分の気もちを大切にして上げてよ。夫が『好き』っていう純粋な、誰かを思う気もちなら尚更だよ。もしかしたら、其人も、つま子ちゃんの其気もちを待っているかもしれないんだから」

聞いていて、恥しくなる。どうしてこんなに真っ直な気もちを、恥しがらずに、其儘、ぶつけてこれるんだろうと思う。太陽のようだ。だから、私は、灼かれて焦げる。

私の気もち。私の気もち。本当は、私だって、もっと欲しい。全部欲しい。もっと知りたいし全部知って欲しい。もっと仲好くなりたい。ずっと一緒に、くっついて眠りたい。手をつないで歩きたい。一緒に笑いたい。私だって全部欲しい。世間一般の人が持っているもの全部欲しい。

本当は其んなに、其所まで、馬鹿にされる程不細工と思っている訳じゃない。何一つ得

られないような不好だなんて思っている訳じゃない。町で写った窓ガラスで、お風呂上がりの鏡で、左様なに、悪くないんじゃないかと、本当は、少しだけ、可愛いと、可愛いんじゃないかと、思える瞬間だってある。赤の他人なんかに、馬鹿にされる程、不細工と思っている訳じゃない。

「好きです」

私の気もち。

「あなたのことが」

本当は欲しいのに抑え付けられた、私の気もち。

「ごめんなさい」

夫でも、初めて、伝えたいと思った。

「……え？」

そう思った私の気もちは、彼の顔を見て、今、干涸びた。

その顔。

ほら、私みたいな不好は望んじゃいけなかった。

四

失敗した。失敗した。其後私の脳裡に充ち充ちたのは其一念だけだった。熱に浮されて、余計なことを言った。唆のかされた。恥を、かかされた。

少し呆けた後、我に返った陽樹君は「え、あ」と言った。

「ぼくのことが？」

私は俯向いていた。糸かに頷突いた。あの一瞬の表情で、もう、答は、分っていた。

「あー」

陽樹君は声を長く伸して時間を稼いだ。

「ごめんね。つま子ちゃんのことはとても好きだし、魅力的な子だと思っているけど、ぼくには好きな人がいるので、応えられません。ごめんなさい」

言って陽樹君は深く頭を下げた。私は其儘埋ればいいのにと思った。

左右すれば私の恥は失くなる。

其後、途中まで並んで帰ったが、お互に一言も喋舌らなかった。別れの挨拶として私が頭を下げると、陽樹君は「じゃ、じゃあね」と上擦った声で言った。いつも私が背中を見送る道を私は黙々と振り返らず歩いた。陽樹君の叫ぶ声が聞えた。

「あの、ありがとう！　嬉しかった」

私は振り返り、少し丈頭を下げた。

家に帰ると、唸り声を上げ髪を掻き乱しながらベッドに身を抛げた。失敗した。失敗した。どうして、あんな、勢いの儘言って仕舞ったんだろう。浮れていた。浮された？　あんな言葉にのせられて、振り落された。

何が「人に気もちを伝えられるのは素晴しい」だ。左んなの、美男美女の、其所までは行かなくても、人に嫌悪感を持たれないレベルの人の、きれい事だ。ネットを見れば、「ブスに告白されても嬉しくない、迷惑」だなん

て意見はどこにでも見つけられる。私だって、同じクラスの関口君から告白されたら、そう思う。嬉しくも何ともない。陽樹君の、あの顔を見ろ。「信じられない」というような、「他に告白できる顔か」というような……

バタバタと暴れていたら、「津甘、皐蠅い！」とお母さんに叱られた。じっとしていたら、私、ふられたんだ……と徐々に実感が湧いた。泣きたくなった。初めて告白する時は、絶対に、成功したかった。失敗したくなかった。傷つきたくなかった。だから、告白する前に、告白されたかった。好きな人から。陽樹君から。その可能性を自分から失くなした私は、本当に、馬鹿だと思う。

お母さんから晩ご飯の仕度が出来たと呼れたが、食欲がなく、喰べたくないと断わった。しばらく部屋で茫っとしていた。気づいたら少し眠っていた。目元が濡れていた。起きると、お腹が空いていて、残っていたご飯を喰べた。こんな時でもお腹は減るんだと思うと

悲しくなった。生姜焼きが旨しくてご飯を少しお替りした。

翌日、私は沙織莉と藍を極力避けた。移動教室の時は、用事があるふりをして先に行ってもらい、休み時間になったらすぐ立ち上って宛もなく構内を狼付いた。沙織莉と藍が仲好くしてくれるより前はずっと一人だった。でも、其時は、ただ机に突っ伏して休み時間が終るのを待てば好かった。此んな、面倒なことを、仕なくてよかったのになあと、出入が禁止されている屋上の前の階段に座って、近くを通る足音に怯えながら思った。

陽樹君の方も見ない様にして過した。沙織莉がこちらを見ている様に思い、校内を歩きながら、いつ迄こんなことをしなくちゃいけないんだろうと退屈に思った。歩く所なんて多くない。行きたい所もしたいこともない。沙織莉と藍からの「何かあった？」というメールにも、「体調が悪くて」で返した。

私はいなきゃいけない人間じゃないんだからこんな態度を続けていれば二人ともすぐに忘れてくれるだろう。夫迄の辛抱だと思う。

思っていたが、三日目に同じように校内を歩いていると、忽然腕を掴まれ物蔭に引込まれた。沙織莉だった。

「つま子」

聞いた事のない低い静かな声で語りかけられる。

「は、はい」

「何か言うことあんじゃないの」

私は萎縮して思わず頭を下げた。

「ご、ごめんなさい」

「何に」

沙織莉が表情を動かさずに言う。

「夫は何に詫まってるの」

「わ、わかりません」

「あんたはこどもか！」

大声を上げられ私は慄栗とする。身體が強張る。そばに居て様子を見ていた藍が

沙織莉を諌める。

「沙織莉、大声出さないの。つま子、最近、様子がおかしいから沙織莉と心配してたの。何かあったんでしょ？　それを、話せとは言わないけど、突然避けられるのは私達も淋しいよ」

「話せ！」

「沙織莉。単に気もちの整理がつかない丈なら、そう言ってくれれば私達も待つよ。もし私達が何かしたなら、ちゃんと詫まらせて。何が原因でも、どんな内容でもいいから、一度話をさせてくれたら嬉しい」

藍に静かに話しかけられると、胸に迫った。二人のことを直視できない。儘喋舌った。

「沙織莉ちゃんと、藍ちゃんに、何かされた訳じゃないよ。そんな訳ない。単に、私が、今迄勘違いしてた丈だから、夫に気付いて、直そうとして、もともと一人慣れてるし、二人に、仲好くしてもらってるのが、おかしいって、だから、夫で」

自分でも何を言っているのか分らなかったが、他に言葉が出なかった。沙織莉は案の定「全然分らん」と叫んだ。

「それ、誰かに言われたの。誰が言ったの」

「誰かに、言われた訳じゃないよ」

「そいつら殺す！」

「沙織莉。つま子、私達と仲好くするのはおかしいって、自分で、何となく思って、それで私達を避けたってことなの？」

藍が纏めてくれたので私は頷突いた。沙織莉が大きな長い溜め息をつく。

「陽樹のことじゃないの」

私は床のタイルを見ながら固まった。あの日の彼の顔が不意に蘇える。

「何か、聞いたの」

「何も聞かないよ。あいつはこういう時馬鹿みたいに何も喋舌らないからね。でも馬鹿だから態度に出まくって端から見てたらすぐに分るんだよ。そうしたら、つま子も、おかしいでしょう。何かあったんだろうなあとは

思うよ」

私はどうにかして胡麻化す方法はないかと模索した。恥を隠したい、これ以上傷つきたくない、私と、陽樹君が釣り合わないなんて、誰が見ても分る。分を弁まえない不好だなんて、誰にも思われたくない。私を責めるのは私だけで十分だ。

「私は」

「一つ、詫まらなくちゃいけないことがあるの。あの日、つま子の様子が可怪しいからって公園に陽樹を向わせたのは、私。つま子、あいつに好意持ってたでしょう、夫がどこまで強い気もちかは分らない、友達としては好き位の気もちでもいい、デリカシーないのは分ってる、でも言わせて。私はつま子が陽樹に好意を持ってると思い込んでた、陽樹も、多分、話が合って面白いって言ってたしつま子のこと悪くは思ってないと思ってた、だから、短絡的だけど、二人が仲好くなってくれればと思ってた、いつか、二人が付き合

ってるのが見たいなと、思ってた。あいつ馬鹿だよ。あいつの好きな人、あいつ、馬鹿なんだよ。だから他に、身近な誰かに目を向けさせたかった」

「好きな人って、沙織莉ちゃんのことじゃ」

「私じゃないよ。私に彼氏がいるのあいつも知ってるし、どちらにしろ其んなことは全たく関係なく、私じゃない」

話を聞いて混乱した。自分の好意を見抜かれていたのがたまらなく恥しかった。床を見つめる視界に怒気が籠る。恥しさが、行き場を失くして、暴れた。

「か、勝手だよ。別に、好きなんかじゃないのに、そんなお節介されたら、迷惑。迷惑だよ。私みたいな不好に好かれたら、陽樹君だって、迷惑」

「迷惑ってあいつが言ったの」

「い、言われてないけど分るでしょ、私みたいなのに好かれたって、迷惑だって」

「私みたいなのって何？　誰かを好いたら

迷惑になるような人ってどんな人？」

「不細工な人だよ！　私みたいな不好が、全然、誰からも好かれない不好から、好かれても嬉しくないでしょ。根暗で不好でいい所なんて一つもないのにそんな人間が誰かを好くなんてキモいでしょ。何を期待してんだって、叶う訳ないだろって、思うでしょ。うぬぼれんなって、思うでしょ！」

「私は思わない」

「私は思うの！　私は暗くて歪んでて性格最悪だから身の程弁まえない不細工がクラスの誰かを好きって言ったら『うわあ』って思うの。好かれた人かわいそうって思うの。だから、自分が、そう思われても仕方ないって、思うの」

怒りは涙になり悲しみになりとまらない言葉になった。吐き出すと四囲はしんと静かになった。

「自分のこと、不好だって、思うの」

「思う」

「つま子。私のこと嫌いになっていいからこれだけ聞いて。まず眉毛整えよう。顔も毎回今以上に丁寧に洗って自分に合う洗顔料探してお風呂上がりには化粧水塗って乳液塗って手入れをしよう。抵抗あるかもしれないけど雑誌読んで自分に合う服や髪型探して一つずつ試してみよう。いい美容院も探そう。高くなくていいからできる範囲で今の自分にできること一つずつしよう。私も藍も手伝うよ。本当に興味ない人もいるから今まで言わなかったけど、自分が不好だと思うなら、それを嫌だと思っているなら、できることはまだ沢山ある筈だよ。それ全部やってから不好だっていおう。メイクの練習もしよう。女はメイクだよ」

「でも、私は、二人とは元々持ってるものが違う」

「元は違うよ。元はみんな違う。夫でも、今持ってるものでできることするしかないじゃない、誰だって。あの人みたいになりたい

と願えば鼻が高くなる訳でも目がパッチリする訳でもない。自分が嫌だと思ってれば肌が綺麗になる訳でも痩せる訳でもない。今できることをするしかないんだよ。夫でもダメなときに諦らめよう、全部放り投げよう、泣くのも笑い飛ばすのも私達が付き合うよ。だから、私達がダメなときにも、付き合って。夫が友達でしょう」

私は言葉に詰った。恥しさは、暴れていたけど、言葉になって出て行こうとはしなかった。沙織莉はふっと力が抜けたように笑った。

「何より元が違うのはこの人ですよ。私がひたすら手入れしてメイクして胡麻かしているのに大した努力もせずこの顔、肌、髪の艶ですよ」

沙織莉から指を指された藍は髪を一束つまみ、それを見てから照れ臭そうに笑った。

「そうかな。ありがとう」

その仕草に私は見とれた。空気が緩むと、

私の胸に詰っていた固い物が少しずつ解れた。ほぐれて肺が広がり、空いた隙間に涙が盈ちた。

「ごめん、ごめんね」

今度は静かに泣いた。泣きやみたいけどとまらなかった。何かを、説明したいように思ったけど、言葉が出て来なかった。藍がゆっくりと背なかをさするので、私の背なかは温まり、固い物は益零れて落ちた。

沙織莉が静かに言った。

「大丈夫だよ。言える時で大丈夫。落ちついて、整理ができたら、いつでも言って。いつでも聞くから」

私は涙を拭いながら頷突いた。藍が差し出してくれたティッシュで洟をかむ。遠くで生徒の人声がした。もう昼休みが終るのか、と気付くと沙織莉が又大声を出した。

「あと一つ！　君に言いたいことがある」

私は驚ろきおののき怖々答えた。

「な、なんでしょうか」

「私はね、名前の呼び方なんてどうでもいいと思ってる。どうでもいいと思ってるけど、どうでもよくないこともある！　つま子の『沙織莉ちゃん』『藍ちゃん』これはね、距離がある、遠慮を感じる。あんたは私の友達だよ。少なくとも私は左右思ってる。誰が決めたことでもなくて私がそう思ってるの。だから、つま子も私のこと、私達のこと友達と思ってくれるなら、そんな他人行儀な『ちゃん』はやめて。失礼でもなんでもないから呼び捨てにして」

私は言われて戸惑った。遠慮から『ちゃん』を付けている、訳ではないつもりだった。何より改めて呼び捨てにするのは恥しかった。助けを求めて藍を見ると、藍はいつもの優しい表情で、ゆっくりと頷突いた。

「藍」

流然と名前が出てきた。それから沙織莉を見た。

「沙織莉」

藍が嬉しそうに笑い、沙織莉が厳そかに頷突いた。その後沙織莉が言った。

「なんかキモい」

「こらー！」

失礼なことを言われたので怒って追いかけると沙織莉は大声で笑いながら逃げた。藍はその場で声を殺して笑っている。私はもう一度目許を拭いながら、沙織莉の背なかを目指して走った。

〈未完〉